

鯉組

238

2011.6

終刊号



根本・明
草野早苗
平田好輝
小林尹夫
福原恒雄
すみさちこ
仲山清

根本明

たわぶれの谷津

潮浴びる千葉街道を越え黒砂村の陰りを過ぎる

いまむかし、いまむかし

私のあなたの内なる子供ら

おわらわ、めわらわ、赤子や胎芽

おびただしいま裸の群生が

私をあなたを揚がらない風のようにうつつの地を打ち引きずって
てんでに乱れお札参りを叫び泣くこと

谷津のみず田をさかのぼっていく

白鷺が木蓮の花となって眠る林には

京成電車の踏切の音が

私やあなたの古い家族の時をめくるように渡ってくる

工学部前、いや浜海岸という駅の名だったか

そのあたりから衣をひらひら

パチをはじいて鳥追い女が舞い降りてくる

(私らのだれが彼女を見たのだろう)

こさぎよ、ほーい

みず田も川も陽炎のなか

こあじさしよ、ほーい

あら物すこく海は干あがる

さあ、銀漢の旅の夢

さあ、みず田や海を彫りつけて

子らの鳥追いの歌が沸きたつ

有情や非情、ほーい

植物の芭蕉さえ人に化身し

草木国土悉皆の喜怒哀を訴えることがあるのだから

歌は人の幼生にとどまらない

谷にあるなべての命、流れる用水、畔や崖土

地層の下の海の跡、木舟のかけらにいたるまでが、ほーい

歌に共振れていく歌を湧きあげ

渦巻きながら谷をいっぱいに木霊していく

谷の天を覆って

鷺が舞う

花吹雪のように羽根を降らせ

ま裸の子供らの髪を飾り手のひらを明らめる

私もあなたもそれを聞く

おびただしい私やあなたがそれを見ている

夕暮れ通りの一角で遊んでいるような蝶は

福原恒雄

いけしゃあしゃあとスピードを乗せて過ぎる車もきょうの水を探すリストラにも（覚えてしまったことばが身にしみて）うごきを急かされる歩行者天国で手で食べられるコトバが降臨しないかと仰ぐ。無力が掴む矛も盾も恨みいろでぎこちない。

やけを歌いたい真ん前にきのは食事^{たべごと}上手だったやつが近づく。わけもなく額がこわぼって何する気だようと栄養不足が緩慢にそいつの目を押しやりながらも誘拐するなら持つていけといきがると触手から畳まれて真っ逆さまに箱のような通りの隙間に閉じこめられる。黙る。

捕獲能が舞いおどったのにちがいない。でも諾々としてはおれない。生きていた呆然が足掻くとさらに気まぐれの熱いハイヒールの先っぽが蹴り上げる。（ハイヒールを履いている虫もいたっけ）くずれる隙から見た天井は卵いろの虚空。

舐めるほどの蜜が欲しいだけの夢のまねをする残余の一挙手一投足がもがく。パフォーマンスパフォーマンスとはじけるリズムをトレンデーなこの世の譜面に貼りつけあちらこちらと命懸けと聞いたような挨拶代わりをどこに届いてもかまうものかとゆきついたきのうの貸しスタジオで見て呉れがいいとはいえない筋肉の舞踊。

おいおいそんな蝶は聞いたことがないと半信半疑が見つめても出鱈目細工の暮色の通りはひりひりする時間の方向に遊びたい虹を描いて行先惑いよろしくおぼろの光りがのっかると過去はいらないし未来も見えない呼吸は過剰の雲行きに囲まれて。

きせつを越えて目があくか閉じるか遊んでいるような蝶になる笑い。ゆっくり失せるのでも潰されるためでもなく飛翔の持続にのろまにしがみつく軌跡は強烈な臭気で。

巡礼

草野早苗



乾いた風の吹く南の町に
櫛の木のよりに細長い扉がある
私は扉を叩く

「入れて、入れて、入れてください」
扉は拒絶し

私は壁の呼び鈴に気付く

呼び鈴の音が反響するのが聞こえて

扉の錠がはずれる

押しても開かない

手前にひいて

体を横にして

やっと通る

斜光の射す黒と白の大理石の格子縞の床

白い石に白く落ちているもの

私はそれを拾って

頭に被る

機械部品のように

びたりとはまる

やがて始まる巡礼

白いものを被った私は

子宮を傷つけ産道を傷つけ

外に出た

スーパーマーケットの片隅で売られている

三個千円の帆立貝

頭の継ぎ目がかすかに疼く

斜光の射す黒と白の大理石の格子縞の床

落ちている帆立貝のかげら

道はまだ彼方に続き

傷ついた子宮を前かがみに抱えた

老いた母の影が横切る

写真

平田好輝

M氏の話で一番印象に残っている話というところだ

M氏の二番目の詩集を出すことになって
写真家の土門拳さんのところに

表紙の写真を頼みに行った

「きみ それを担いで

付いてきますか」と

土門氏は言い

M氏は重い機材を担いで

付いて行った

やたらに歩いてから

いよいよ撮影しようということになり

土門氏は目の前の路上を

バチバチと何枚も写してくれた

たったそれだけのことが

凄い迫力だったと言って

M氏はあまり感心したふうでもなく装って
ぼくたちに話してくれた

そんなわけで

M氏の二番目の詩集は

土門拳の装幀となっていて

道路のシミが写っているだけの

ヘンな装幀なのだが

その大胆な装幀は

仲間の間の語りぐさになった

「土門さんとは親しかったということですか」

「イヤ 写真展を見て

ぶらりと訪ねて行っただけでね

頼んだら すぐに

撮ってくれることになったんだ

その日 ちょうど

彼がヒマだったんじゃないかな

機材を担いで

助手みたいに付いて行って

バチバチバチッとやってもらって

いっぺんに すんでしまったんだ」

M氏も土門拳氏も

そして 話を聞いただけのほくらも

あのころは本当に若かった

棲息

48

小林尹夫

空は空っぽなのか 溢れているのか
青いのか 白いのか 赤いのか 黒いのか
まっすぐなのか 曲っているのか

生がそうでないように そのいづれでもない
死がそうでないように そのいづれでもない
世界の各地で言い伝えられている昔話は
真実を隠すために嘘をついているだけ

空はドームだ クジラの腹だ
大地は円盤だ ゴウの背中だ
空っぽで一杯の空を見上げながら 私たちは
生き物ではないように暮らしている ただの生き物

みな自分よりも大きいという蟻の覚悟が蟻の世界を守り
いつかは追われるというライオンの覚悟が
百獣の王を守り未来も過去も一杯で空っぽ 空っぽで一杯



教師

すみさちこ

鳴き始めの若い鶯かと思った
音をひとつ多く唄う
横浜をすこし南にくだった辺りの里山

ならば正調をひとふし
口笛を投げかけると
被せるように応える変調のリズム
面白がる正調に執拗に覆い被せる
覚えたてではなく

この辺りの鳴き方なのだろう
駒ヶ岳の深い笹藪の道でも聞いたことがある

私は良い教師にはなれない
どの生徒にも万遍なく
ひとりひとりを依怙鼻負する職業的偉大さはない
好きにおやりと聞き捨てる

良い教師にはたいいてい
何人かのおマセが熱をあげる
変調で教師の気を引く
どう鳴いても 踊っても
特別な課外授業は無い

ホー ホケキキヨ 変調が食い下がる
ホー ホケキキヨ 教師は唄う
百回も千回も正調を崩すことはない
変調に歩み寄ることもない
ポリシイだからでもない

単に職業的慣習が抜けないだけ

あかね坂

仲山 清

あかね坂に綱を張った
どんな綱か

問えは答えが返ると おもっているか
おまえを捕らえる綱かもしれないぞ

陽をうけてあかね坂がますます赤くかたむけば
天窓もよるよるおちて

おんながクリようかんをなめている
しらはつくれたって もうおそい

むすめの運動会は町内対抗の綱引きで
ちくしょう

あつ、と口をふさいでも もうおそい
綱はするする相手方へ

いっしょに綱をつかんでいた
くすり屋の主人もするする
なじみの淑女の口から出た
ちくしょう に固まって

おんなはそれから

けもの皮でこさえた函に入り

けもの皮のふたをして

クリようかんをなめ

たまには夫の稼ぎのせ二をかぞえ

くすり屋に用があればむすめに行かせ

あれは、おまえにいいと見せたくてつい

出ちゃったのさ もうおそい

あかね坂は慥愧のいろをますます濃くして

あの日の綱を

綱から綱へ

いまにあいつが綱にかかる

バラして練ってようかんに

けものふたを薄くもちゃげて見すかせは

ああ あかね坂にきょうもでっかく陽がおちる

満月じゃなくても吼えたくなるぞ

おんなは吼えた

動物園がゲートをひらく -2- 仲山 清

そらに長く伸びた藍鈍色のものがそらに影を引いて倒れかかってくる、枝も葉もない植物……と見えたのはキリンだ。だがなぜキリンとわかったのか、どこが頭部なのか植物と布きれとそしてキリンと区別もつかないままゆらめいてかぶさってくるようだ。こうした感覚はあとをひくばかりできりが無い、なんでもいい、長いものが降りてきて首にでも巻きついてしめあげてくれないかとさえおもう。窒息はやがてあいまいな快感となって脳を弛緩させるだろう、死はおしまいのおしまいに快楽としてちいさく控えている、ふたをとってはいけない玉手箱だ。

二頭のキリンはふとい棒状のものでつながっている。そこではどんな情報が行き交っているのやら、二頭のキリンはそれぞれにある種のラッパのようでありながら黙々とつるんでいる。すでに一頭は灰色で生きているとも死んでいるとも知れないのだが、背後からのしかかるやつはおのれの黒い棒をねじ込み、やがて動物園のそらまでも黄色に染めぬこうとしているかのようだ。若い女が目を伏せて檻の前を通り過ぎる、いや檻のなかだったか、女はむかしの妻のようでもある。何度も何度ものしかかった、そうして息子が生まれ、いま動物園のゲートの前で家族としてつるんでいる。そうしてわたしだけがキリンの交尾をみている、キリンをみている、青鈍色の植物をみている、うすれていく影をみている、行楽日和のそらをみている、どこにあるのかスピーカーにスイッチがはいる音がする。いよいよゲートがひらく時間だ。つまり動物園が弛緩する、動物園が死ぬ。電気に増幅された女の声にそここの鉄がしびれている、錆がこそげるとおいがする。



寿三郎の峠
仲山 清

春の草花ただよいひらく海峽を
男は大またで渡つてくると

峠にしゃがむおれの前にきてしゃがむ

ここのかたですか

この峠のものだ

一枚のピラひらひらさせる

社名と姓をいう

傾いている電柱なおします そのこ

それで黄色いヘルメットか

おれはオートバイを磨く手をとめ

海峽に顔むけた

きちんと垂直に立つている電柱なんてまだだからな

架空の分度器をかざして測れば

4度、あるいは5度くらいか

ひとが名を名乗つても直さねばならぬ傾きなのだろう

偽名かもしれないが匿名ではない

(その差いかほどか定かでない)

で、おれになにをしろう

うるさかったりするかもしれないから

そんながまんはおれにもできる

大騒音を十日ばかりまきちらしたばかりだ

あれ我慢できればたいいの騒音は我慢できる

クルマ停めたり、作業したり

あした朝から昼までの二時間ぐらい

あれの倍の騒音でもいいぞ

あの家あきやですか

電柱の向こうに浮かんでいる家

ひとはすんでいないが、家主の車庫がある

去年の春モンキチヨウが玄関のガラス戸に体当たりしていた

そのまえまでは間借り人（女性に限る）募集の木札が下がっていた

昔になるが 幼児を連れた中国人夫婦が住んでいた

窃盗団の一味で、ある朝おれが知らないうちに警察が踏み込んで

家族三人ひったてていった

それよりずっとまえ、そこは大海原だった

大地震があっても傾くものがなかった

ポストもない と男はいった

傾くポストもないのかさびしいな

ピラはポストへと男は気をきかした

おれはオートバイ磨きで手が離せない

オートバイも海峽の側へ傾いている

詩的ではなく宇宙的なものの道理で

男は立った おれは立たずに

ポストが音たてるのをきいている まるで

たつたいまきよういちにちが終わりましたとでもいうような

あわただしくもきつぱりした音

ああ、いちにちをいちにち何度でも終わるがいいさ

それから男は海峽を渡っていった

サギのごとくゆるりと羽ばたいて

そうしてしばらく傾いた電柱のてっぺんで思索するふうだ

おれは肩越しに見た

男の黄色いあたまが風にそよいでいるのを

おれの自慢のマシンはびかびかだった

いますぐにも峠をあとにしよう 南へだ

あなたは渡り鳥ですか

そう、峠の渡り鳥だ きみは電柱の留鳥か

■今号の執筆者

福原恒雄●日本現代詩人会、日本詩人クラブ／「掌」同人

詩集『跳ねる記憶』『ノート』『生きものの叙説』『おばあさんを盗む』『体の時間』他

仲山 清●詩集『サイキ』『さらば、ろくでなし』『凶器I調査』『飛行の構造』

小林尹夫●日本詩人クラブ 日本ペンクラブ

詩集『ツツクタツカキツク』『方舟の光景』他

草野早苗●年真(中絶後)＋詩『PINK TO THE PINK 2002-2004』『PINK TO THE PINK 2005-2007』

根本 明●日本現代詩人会／『HOTEL 第2章』主宰

詩集『つ、突くような顔でガラス戸に』『未明、観覧車が』『市原市鑑異記』他

平田好輝●日本現代詩人会、日本ペンクラブ／「青い花」同人

詩集『海は遠いものに』『恩師からの手紙』『ひと夏だけではなく』
小説集『孤独の舟』 随筆集『狭い部屋』他

すみさちこ●日本現代詩人会 詩集『火を見つめる時間』『イソップ話』『過ぎてくすれず』『卵料理』『桜神』他